

学会参加報告

ジョージア・日本間外交樹立 25 周年記念国際会議

ジョージア・日本の対話：その歴史と未来の学術・文化的協同

五月女 颯

本稿は、2017 年 6 月 28、29 日にジョージア・トビリシ国立大学にて開催された上記国際会議に関する報告である。

会議はイヴァネ・ジャヴァヒシヴィリ記念・トビリシ国立大学（以下 TSU）文学部極東地域研究科並びに東京大学文学部現代文芸論研究室の共催で行われた。TSU 側からはナナ・ゲラシヴィリ准教授、東京大学側からは沼野充義教授が、それぞれの代表者として会議の実質的な企画を行った。筆者は前年よりトビリシに滞在しており、双方の間を取り持った（とはいえほとんどは両先生方のメールのやり取りで物事は進み、実務的なことはほとんどしていない）。使用言語は英語。発表者は日本人が 9 名、ジョージア人が 4 名である（下記参照、敬称略）。

【参加者とプログラム】

28 日（水） TSU 第 1 ビルディング 115 番教室

10: 30 開会の挨拶

ミヘイル・チヘンケリ TSU 副学長

ナナ・ゲラシヴィリ 准教授

沼野充義 教授

11: 00 第 1 部：議長 沼野充義

児島康宏：東京外国語大学 講師、在ジョージア日本大使館 専門調査員

『豹皮の騎士』の日本語訳

沼野充義：東京大学 教授、現代文芸論研究室

「“Sakartvelo Dreamin”—日本におけるロシア文学を通じたジョージア受容」

ナナ・ゲラシヴィリ：TSU 准教授、極東地域研究科長

「日本における仏教文化の成立」

タイムラズ・パパスキリ：TSU 教授、近現代史学科長

「ポツダム会議での日本の問題」

金子遊：映画・文学批評家、慶應義塾大学講師

「ジョージア映画の可能性」

13: 30-14: 30 休憩

14: 30 第2部：議長 ナナ・ゲラシヴィリ

楯岡求美：東京大学 准教授

平野恵美子：東京大学 助教

「日本におけるジョージア舞台芸術」

ソピオ・ググナヴァ：社会科学博士、TSU 講師

「日本の宗教伝統における女性の役割」

ジャバ・メスヒシヴィリ：歴史学博士

「日本人社会指導者 武藤山治と「軍事救護法」(1917)」

原田健秀：岩波ホール・プログラムディレクター、日本・グルジア友の会会員

「日本でのジョージア文化の普及——東京・岩波ホールの活動」

16: 45-17: 00 休憩

17: 00 五月女颯：東京大学 院生

「自然との対話——ヴァジャ = プシャヴェラと宮澤賢治の比較」

高崎郁子：アテネ・フランセ文化センター、明治学院大学 院生

「日本におけるジョージア映画の受容」

17: 30 閉会の挨拶

29日(木) TSU 第5ビルディング 306 番教室 日本語日本文化センター

15: 00 筒井武文：東京藝術大学 教授、映画監督

『自由なファンシィ』上映、アフタートーク

【1日目(28日)会議】

(もちろん) 時間通りには始まりず、TSUからの来賓の到着を待った為30分程度遅れて会議は開始した。発表の本数も多く、学会の終了もそれに伴い遅延することが危惧されたが、質疑応答を第1部の全発表後にまとめて行うなどの対応が取られ、第1部終了時には遅れはほぼ解消された。

冒頭の挨拶では、ゲラシヴィリ先生、沼野先生により本会議の意義について触れられた。会議の題にもある通り、ソ連時代より、またグルジア独立から(本会議は独立25周年記念の一環としても執り行われた)今日に至るまで日本・ジョージア間では様々な文化的な交流が大学及び民間の様々なレベルで図られてきた。本会議は、多様な報告者が各々の専門分野の見地から両国間の交流を総括しつつ、その将来の発展への里程碑となることが確認された。

各報告の具体的な内容については、別冊のプロシーディングに記載されており、そちらを参照していただきたい。各発表に対して、冷房無しの暑さに負けぬ熱心な質疑応答や議論も活発に行われた。

【2日目(29日)映画上映】

筒井監督の作品『自由なファンシィ』を上映した。この日は前日に増して気温が上がり、

また映画上映のため窓を閉める必要もあったため、非常に厳しい環境での上映となった。また会場が授業に使用される通常の教室で、映画上映のためのものではなかったため、映像機器が Blu-ray 非対応につき止む無く DVD を使用した。更に暗室に近づけるべく紙類を窓に貼るなど応急処置的な対応が必要となり、開始前は慌ただしいものとなった。

映画上映自体は成功裡に終わったのではないだろうか。映画の内容がやや難解で、現代日本の自由な女性像と、その女性に翻弄される男性像がテーマである、との解説が筒井監督自身から上映前にあったものの、ジョージアの出席者がどれほど理解できるか、との疑問はあった。しかしながら、上映後のアフタートークなどの様子からも好評を博したように見え、監督自身と交流、対話するという貴重な経験を観客は得たはずである。

上記の通り、本会議は、これまでの両国間の文化的交流を概観し、これからの交流や理解に向けた礎石とすることが大きなテーマとしてあった。日本においては、ジョージアに関する多からぬ情報は、長らくロシア経由で得られてきたといつてよい（「グルジア」！）。このことは日本側の発表内容からも具に窺い知ることができる。そうした、いわばロシアというフィルターで濾さない、ジョージアないしポスト・ソヴィエト諸国の文化・芸術の実情を理解することが、これからの課題として挙げられるのではないか。この意味で、ジョージア映画の日本での上映・普及のための原田氏の長年の尽力は、数少ない日本でのジョージア文化の直接的な受容として評価されるものであり、これを継続することは若い世代にとっての義務である。



対してジョージアでは、柔道などの格闘技や日本車、また若者の間では漫画・アニメなどによって日本のイメージは一般的に形成され、またよく知られているものの、アカデミックな研究は進んでいるとは言い難い。特に文学・文化研究は（発表テーマを見てもわかるように）ほとんどなされておらず、今後の課題と言えるだろう。もっとも、今回は都合が付き残念ながら参加できなかったが、文学研究所所長のイルマ・ラティアニ教授は、ジョージアでの文学研究の第一人者にして日本に数年の滞在経験があり、滞在経験をもとにしたエッセーも出版している。もし次回があるならば、あるいは違う形で学会やシンポジウムを（日本でも）開催する際には、ラティアニ教授も含め、文学研究者がより参加していることを期待する。最後に、学会以外でも、日本からの参加者でジョージアの諸地方（カヘティ、カズベギ）を巡り、その文化を直に体験した（写真はプーシキンやレールモントフなどが作品の舞台としたジョージア軍道にて）。